『社会科学ジャーナル』50〔2003〕
The Journal of Social Science 50〔2003〕

湯浅八郎と二十世紀（二）
昆虫学から「同志社事件」渦中へ

武田　清子

〔1〕労働少年とアメリカの大学

新島襄先生を育てた国アメリカ—というイメージが夢をもたせたのであろうか？18才の八郎少年は何の具体的プログラムも持たずに、単身でアメリカへ渡った。一種の少年移民であった。

労働移民から昆虫学の専門家となったプロセス、京都帝国大学に新設された農学部の教授になって若い学徒を育てることを楽しんだ平和な時代、そこから超国家主義の渦巻く「同志社事件」の渦中の人とならねばなかった経緯は、すべて湯浅にとって意外性に富んだ激変の歩みであった。ことに湯浅八郎のような一見、単純な一本調子の考え方、生き方の一人の人間を、二十世紀という魔物的な要素を含んだ時代が、いやおうなく引きずりこんで行った歴史の足あとともも思える。

少し冗漫になるかとも思えるが、まず昆虫学者への道をたどっておこう。

1908（明治41）年 8 月、カリフォルニアにわたった八郎は、リヴィングストン (Livingston) の原始的な開拓農園で三年間働いた。しかし、アメリカへひとりで送り出すことに湯浅家があまり心配しなかったことの一つに、母初子の姉、音羽子とその夫大久保眞治郎が、ハワイ伝道からカリフォルニアのオークランドに移り、日本人移民たちのための独立教会をつくっていたこと、この教会の寄宿舎を拠点として八郎がアルバイトをはじめることができたことなどもあったのではないかと推察できる。大久保夫妻の娘久布白落美は、当時、太平洋神学校の学生であった。

そのうち、大学への進学を決意した八郎はオークランドの教会に帰り、公立

の小学校、高等学校(ハイスクール)で基礎からの勉強をはじめている。大学入学への準備がととのったところで、農園で長く働いた経験から農科大学を志し、多くの大学に学資を持たず、働きながら学ばねばならないが入学させてくれないかと手紙を書いた。すると、カンザス大学 (the University of Kansas) から入学許可の返事が来た（現在の Kansas State Agricultural College と思われる)。アルバイトの可能性もあるとのこと。八郎は 3 年働いた結果、お金は70ドルしか持っていなかったが、そのお金で1911（明治44）年、未知のカンザス大学に出かけたのである。

当時、日米関係では、排日移民法が問題になっていた時期であるが、この地方ではそういう問題とは関係なく、カンザス州立農科大学は八郎を寛容に受け入れて、学ばせてくれた。田舎町の学生食堂や安いレストランなどで皿洗いなどのアルバイトをしながらの学生生活であった。

その時、生物学の教授が、大学の自分の仕事を手伝わないかといってくれた。即座に「やります」というと、履歴書も保証人もなしに採用してくれて、その辺に行って馬や牛の骨を拾って来いという。そしてそれを鋸で切って磨いて、顕微鏡の下で骨の構造をみる標本作り（学生の実習用）をやれということであったという。それが彼の夏休み中の仕事となった。入学の時、園芸学をやりたいと書いた筈だが、 4 年間の在学期間中、園芸の講義は一度もきかなかった。こうしたアメリカ人の大ざっぱさ、鷹揚さ、人のよさ、東洋から来た日本の一苦学生に対する寛容すぎるほど寛容な態度と取扱いなどが、湯浅八郎のアメリカという国、そしてアメリカ人というものについてのオプティミスティックな“原体験の一つ”となったのではないかと考えさせられる。これは、その後の諸々の経験は別として、少なくともその当時の「田舎」のアメリカ人から受けた「アメリカ」というものの原体験だったのではないかと思える。

さらに大学時代、求められてかかわったカンザス州立農業試験場の仕事が、彼を昆虫学に結びつけた。「やるべきことは全力投球でやれ」と子ども時代から母に叩きこまれてきた生き方を考え、研究に励んだと湯浅は語っている。このようにしてカンザス大学卒業前に、カンザス州立農業試験場の所員となってい

たのであり、所員リストに彼の名も記される一人前の研究員になっていたというのが御自慢話の一つであった。

卒業後、さらに研究を進めるためにある教授の紹介によってイリノイ大学大学院に志願し、奨学金をも授与されて1916年入学、1917年には M.S. を、1920年には昆虫学専攻で PhD の学位を取得している。その間、1918年にはコーネル大学夏季大学においても学び、1920年にはシカゴ大学研究員、動物学教室助手となり、1921年には、イリノイ州博物局昆虫学技師となっている。

彼のマスター論文はアメリカの生物学の権威ある教授より博士論文に値するといわれたということである。こうした経緯から推察して、彼は相当熱心に研究に励んだようであり、また、研究成果も秀れていたようである。湯浅はこうした好遇を受けながら研究活動が自由に出来るアメリカ生活を今後も続けてゆこうと考えていた。この間、一度帰国して家族に逢い、また母の日には母に絵葉書を送ったりもしているが、それ以外、母国の家族とのつながりは殆んどなかったという。彼は自分の仕事（研究）に没頭すると、母国日本もアメリカも家族も問題にならない、ひとりぼっちを恐れない、孤立的な存在だったようである。そしてそれが、その後の彼の人生を通しての在り方のいろいろの場面において見出せる特質のようにも思えるのである。

〔2〕結婚・京大農学部教授として

ところが、思いがけない事態で日本に帰らなくてはならないこととなった。

八郎はあるきっかけで、土地の YMCA とつながりが出来た。そして、1919年12月30日～1920年 1 月20日の期間、世界キリスト教学生運動の指導者ジョン・R・モット (John R. Mott) 主催の Christian Volunteer Conference が、アイオワ州のデモインで開催された時、イリノイ大学 YMCA を代表する一人として八郎は出席した。

John R. Mott (1865-1955) はキリスト教関係では、世界的に有名な学生運動の指導者であった。後には、彼は、平和のための福音主義的運動によって1946年、

ノーベル賞を受賞した人物であるが、1919年のデモインの会議の頃は、外国伝道のための学生ヴォランティア運動を推進していた活動期であった。1910年代から1920年代にかけて、モットはアジア、アフリカ諸国へ福音をのべ伝えようと学生たちによびかけ、アメリカ、ヨーロッパ諸国のキリスト者たちを海外における伝道活動に積極的に参加させる大きな推進力であった。当時、モットらの働きによって、「風の流れ」は西洋から異教国アジア、アフリカへと吹いていた。そして、それは、後にふれるエキュメニカル・ムーブメントの一翼を担う大きな活動ともなったのであった。

話を湯浅八郎に戻して、このモット主催のデモインの会議に、後に湯浅夫人となる鵜飼清子も出席していた。彼女は銀座教会の牧師鵜飼猛とその二度目の妻妙子（矢島楫子の娘）との子であり、父猛が卒業したアイオア州のシンプソン大学で学んでいた女学生であった。彼らは親戚であることもわかり、父猛の許しを得た上で婚約し、彼女がシンプソン大学卒業後、シカゴで結婚した。

すると、清子は「さあ、日本へ帰りましょう！」という。昆虫学者としてアメリカで公務員の地位を得ていた八郎は、帰国など考えていなかったという。思いがけない成りゆきで八郎は帰国を考えねばならなくなった。

その頃、京都帝国大学では農学部を創設することとなり、湯浅八郎に講座を担当する気持ちはないかとの招きが届いていた。しかし、帰国を考えていなかった八郎は、「私には関心がありません」（“I am not interested”）とそっけない断りのハガキを出していた。そのことを思いだし、「まだ、可能性はありますか？」と丁寧な問い合わせの手紙を京都大学に出したところ、「帰って来い」との返事があり、京都帝国大学農学部の創設にかかわることとなったのである。京大農学部創設に関しては、姉、にいの夫で九州帝国大学総長で農学博士の大工原銀太郎が相談を受け、責任をもってかかわっていたとのこと、万事は都合よく行ったわけである。

そうなると、文部省より在外研究員の資格が与えられ、海外留学生の手当まで受けて、アメリカよりドイツ、フランス、イタリーなどの視察旅行をするよ

う命ぜられた。そして、関東大震災の翌年、すなわち、1924（大正13）年帰国、同年６月より京都帝国大学教授として農学部昆虫学講座を担当することとなった。八郎は34才であった。日本の大学の学位もあった方がよいということで、アメリカでの研究成果を提出し、1929（大正15）年、東京帝国大学より農学博士の学位を受けている。

このようにして始まった京都帝国大学農学部教授としての10年間（1924年－1934年）は、彼自身もいうように最も平穏な良き日々だったようである。京都大学における湯浅の働きの特質をあげると次の諸点になるかと考えられる。

第一に、当時、日本の大学における学問は、ドイツ流の専攻学科重視の傾向が支配的であった。ところが、湯浅教授がアメリカの大学で身につけてきた学問方法は、今日いうところの学際的であった（後日、彼が初代学長となった国際基督教大学は学際的なリベラル・アーツの大学としての特質をもって日本の教育界に独自な貢献をすることとなる）。従って、狭い昆虫学に閉じこもらず、生態学的（エコロジカル）観点から講義をし、学生たちには、広い分野にわたって自由に関心のあるテーマで研究に取組ませた。他の学問諸分野との境界線上で学問を総合的に研究する姿勢を身につけさせたのであり、昆虫学界に生態学という言葉を持ちこんだのは湯浅教授だといわれる。こうして学んだ学生の中から今西錦司（第二期生）のような生態進化論の独自な学問分野を開拓する学者たちが育てられたのである。

その後、サル学研究、霊長類研究、さらに時を経て河合雅雄教授らの「サルのイモ洗い調査」、社会生態学の研究などへと興味深く展開してゆく京都大学の生態学研究の独自な進展の背景には、湯浅教授の蒔いた一粒の「からし種」が作用していたという見方も出来るかもしれない（今西錦司の外に、岩田久二雄、可兒藤吉、森下清明、内田俊郎らの学者たちも教え子の中にいた）。

また、生命期間の短い海中に住むある昆虫の研究をやりたいという学生には、励ましてそれをやらせ、農学部の紀要第一号にその学生の名で論文を掲載した。こんな研究はつまらないではないかと批判する人もあったらしいが、学問する

ことの意味、方法が基礎的に学べれば、それでよい。そこから彼独自の学問が生まれてくるのだと湯浅は考えたという。

第二に、研究論文の紀要などへの発表の仕方であるが、指導教授の名を第一にあげることが、アメリカでも日本でも学界の習慣となっていた。湯浅は当時の自然科学の領域での国際的通念を破って、彼独自の考えとして学生の書いた研究論文はその学生自身の名前で発表させることにした。どこかに「湯浅教授の指導のもとに」の一行が入っておればそれでよいという方針をとった。その背景には、湯浅のカンザス大学で痛感した経験があった。自分が書いた論文が指導教授の研究であるかのように主任教授の名前で発表され、ジュニア・オーサーとして湯浅八郎の名が付されていることに非常にくやしい思いをしたことがある。私は絶対にこんなことはしないと考えたと語っている。これは学界の通念を破り、学生の主体性とその研究活動の成果を尊重する湯浅らしい断行であったと考えられる。彼は必ずしもアメリカ式を踏襲していたわけではなく、彼独得の信念に基づいて行動していたことが、ここにもその片鱗が見えるように思える。私が「ICU五十年史」の準備をしていた時、ICUの勝見允行教授のおはからいにより、内田俊郎京大名誉教授（昔、湯浅教授の助手をつとめておられた方）が、わざわざ湯ヶ原から東京に来て下さった時のお話でも、非常に自由な学風であった様子をいろいろうかがった。

第三に、京都帝国大学において滝川事件が起こった時のことである。1933年5月、鳩山一郎文部大臣は、滝川幸辰（ゆきとき）京大法学部教授 (1891-1962) を、その自由主義思想を理由に、免官処分にすることを京大当局に要求した。これに抗議して、学問の自由と大学の自治擁護を主張して法学部教授団と学生による抵抗運動が起こった。これを世に「滝川事件」というのである。この滝川問題が京大の評議員会で論じられた時、農学部を代表する最も若い評議員だった湯浅八郎教授だけが、「いま、われわれのとるべき態度は、法学部の正しいゆき方を妨害しないことしかない」と敢然と主張したという[1]。当時、湯浅は佐々木惣一教授をはじめ、法学部の教授たちを訪ねて話しあい、大学をあげてたたかうべき問題だ

ということで共鳴しあったと述べている。これは、自由主義を尊重する彼の信念であった。

このことは文部省にとっても、右翼・軍国主義者たちにとっても、見過ごせぬことであり、湯浅は、これによりブラック・リストに刻印される存在となっていたのである。

この湯浅八郎が同志社総長をひきうけたということによって、「同志社事件」と総称される諸事件の契機となり、彼がその渦中の人として苦難に直面してゆかねばならなくなった。このことには上述の背景が内在していたことが、後になってわかってきたのである。

〔3〕同志社総長としての受難と辞職

当時の政治状勢を概観すると、1931年には満州事変が起こっており、1933年には、日本は国際連盟を脱退している。国内的には、1932（昭和７）年、血盟団事件において井上準之介、団琢磨らが暗殺され、1933年の滝川事件のあと、長野県では、左翼教員200名が検挙されている。

1935年には、美濃部達吉のいわゆる天皇機関説が問題となった。軍部・右翼からの攻撃が激化し、彼は貴族院議員の辞職を余儀なくされ、その著書『憲法撮要』など三著書が発禁となっている。皇道派青年将校が内大臣斎藤実、蔵相高橋是清、陸軍軍人・教育総監渡辺錠太郎らを殺害した国家改造要求の「二・二六事件」は1936年におこっていた。文部省は「国体の本義」を編纂、1937年に30万部を全国に発送している。日独伊防共協定も既に1936年には結ばれており、日本の思想状況は、当時、右翼・軍閥によって右傾への進行を加速させている時期であった。時は多少おくれるが、1937年９月号の『中央公論』に書いた論文「国家の理想」の故に矢内原忠雄は東大教授の席を追われたことも周知のところである（矢内原は国家の理想は正義と平和だと主張した）。

このように緊迫した国際的、国内的思想状況の中で、湯浅八郎は同志社総長に就任したのである（1931（昭和６）年より同志社理事）彼は少年時代より16

年間をアメリカですごした京都大学の昆虫学者である。彼はこのような重責を引き受けるにあたって、相当に迷ったようである。第9代同志社総長大工原銀太郎（姉、にいの夫、元九州帝国大学総長）よりその逝去の数日前に病床にあって、あとをたのむといわれたことはあった。しかし、彼は、まだ生存中の母（彼女は反対だったらしい）にも誰にも相談しなかったが、一週間祈って考えたといっている。父が無報酬で20年余間、同志社のためにつくしたということも、彼の思いの中にはあったかもしれない。彼は真剣に祈り、神の命令だと確信すると、一生、同志社に奉仕しようとの決意をもって、この重責を引き受けることとし、京都帝国大学に辞表を提出した。時代の状況も同志社で直面しなくてはならないだろう問題をも余り深刻に考えず（考えなかったわけではないだろうが）、荒野を独りゆくように単独で決断し、行動した人であった。

同志社の三代目の米人宣教師オーティス・ケリーは、かつて、ある座談会[2]で湯浅のことを「あの人は「ローナー」(loner) ではないか」と語っていたことが私の心に残っている。「ロンリー」(lonely) というのではなくて、一人でいても寂しくない人という意味で「ローナー」ではないか。科学もあり、いろいろの趣味もあり、一人でいてもいい人、人とつきあわなければならない時はつきあうが、一人でいてもかまわない。不思議な人だと思える —— というようなことをケリーはつぶやくように語っている。

この「ローナー」という描写はあたっている一面もあるように私にも思える。同志社事件のさなかの彼、事件後の彼、マドラス会議後のアメリカでの8年間の生活にみる湯浅八郎、国際基督教大学初代学長としてのあの人間関係のむつかしさ、財政面の緊迫状況など、複雑な問題をはらんだあわただしさの中でも、ふとのぞかせた、ある側面などを考えあわせてみると、「ローナー」というような素質もあったのかもしれないとも考えさせられるのである。

さて、1937（昭和12）年に起こった「同志社事件」とはどういう事件であったか、その概要というか、そこに含まれた幾つかの出来事、問題を概観しておきたいと思う。

第一に、湯浅八郎は、上述したように、滝川事件以来、京都帝大評議員時代より、文部省、および右翼・軍国主義者たちから、自由主義に立つ危険分子として「黒星」をつけられ、注目されていたことがあげられる。その湯浅が同志社総長に就任したということによって、同志社が、右翼・軍国主義者たちの攻撃のターゲットになってきたということである。就任第一日目、総長室に届いた手紙類の中に無記名の一枚のハガキがあり、「お前のような奴がどの面（つら）さげて同志社総長になったのか、即刻やめろ」と書かれていた。自分の名も記さぬこのような卑怯で、無礼なハガキに彼は怒った。ここに彼を待ち受ける現実の予告が示されていたのである。

第二に、配属将校問題がある。大正時代に軍縮のために軍人の人員削減問題解決の一つの方法として、諸学校に教練・体育の教師として将校たちを選び、「配属将校」として配置したのであった。それが、昭和の超国家主義的軍国主義時代には、学校教育を監視する軍部の出先機関の役割を担うものに変質していたのである。そして、配属将校がひき上げると、学校は廃校になるというところまでになってきていたのである。例をあげれば、上智大学の学生が靖国神社参拝を拒否したことに反発した陸軍省が配属将校を引きあげるといった。廃校の危機に直面した上智大学は陸軍省に詫びて配属将校を留任させることによって事を治めることができたというケースが顕著である。後述するが、当時、同志社には特に質の悪い将校が配属されていた。

第三に、当時、同志社には「神棚事件」「チャペル籠城事件」「勅語誤読事件」などが続発した。

「神棚事件」（1935年 6 月）は、岩倉キャンパスの高等商業学校において、武道部のある学生たちが、道場の正面にかかげられてあった創設者新島襄の写真をとり除き、その代わりに、近くの商店で当時のお金で50銭程度の小さな神棚を買ってきて、それを釘でうちつけたのである。驚いた学校当局が神棚をとり除くよう命じたところ、一度かかげた神棚をとり除くとは怪しからぬということで、大騒ぎとなったのである。これが「神棚事件」である。

「勅語誤読事件」とは、当時、日本のすべての学校の諸々の儀式において学長（校長）が読んだ「教育勅語」の最後に天皇の名を示す「御名御璽」という言葉が入っていた。それを「おんなみしるし」と湯浅は読んだのである。湯浅の説明によると、「軍人勅諭」の場合には、当時の農村の青年たちにとってはむつかしいというので、「おんなみしるし」と読んでいた。その表現をわざとつかって「おんなみしるし」と読んだというのである。これは湯浅の稚気ともユーモアともとれるのであるが、これが「勅語誤読事件」としてさわがれたのである。そして、これも、神棚事件と同様に即刻、文部省に誰かが知らせていたという。

当時、同志社に配属されていた草川靖中佐は異常性格の持主でもあったようであるが、学内に「国防研究会」と称する学生の組織をつくり、彼が黒幕となって、反動的と思える学生たちを煽動して、湯浅総長排斥のためにいろいろの事件を起こさせていたという。上記の「神棚事件」などもそうであるが、また、剣道部の学生を集めて「チャペル籠城事件」（1937年 7 月）をおこさせ、総長の退陣を要求させた。草川靖中佐は総長に会見を申し込んだこともあり、「草川靖中佐に関する件」と題する記録も残っている。彼は終始、湯浅総長が不適格であることを主張しつづけていたのである。

第四に、「同志社教育綱領」問題も重要である。同志社綱領第三条は「キリスト教を以て徳育の基本とす」である。湯浅は、新島先生の「キリスト教を基本とする徳育」を同志社教育の基本理念として守ることを、心に誓って総長を引き受けたのである。しかし、当時の社会状況では、「キリスト教を基本とする」ということと、「教育勅語を基本とする」ということとの関係で、国体明徴思想を拒否するのかと攻撃を受け続けた。「キリスト教を以て徳育の基本とする」という趣旨は国賊的であるとさえ非難された。総長と理事会は、苦慮を重ねた上、旧綱領はそのまま保持しつつ、時局にかんがみて次のような新しい補足的同志社教育綱領を発表した。

同志社教育綱領

一、　同志社は敬神尊皇愛国愛人を基調とし、之を貫くに純一至誠を以ってする新島精神を指導原理とす。

一、　同志社は教育に関する勅語並に詔書を奉戴し基督に拠る信念の力を以って聖旨の実践躬行を期す。

一、　同志社は基督の眞精神を信奉す。

一、　同志社は敬虔自治日新中正を以って学風とす。

一、　同志社は良心を手腕（かいな）に運用して国家社会に貢献する人物を養成するを目的とす。

昭和十二年三月三日

これを以て、同志社はその基本精神を放棄したと解釈し、同志社は「基督教者主義徳育を抹殺」したと大きく報じた新聞もあった（『大阪毎日新聞』昭和12年3月4日）。他方草川配属将校は、旧綱領を何故排さないかと、湯浅総長を非難しつづけている。（「草川靖中佐に関する件」中、「大学豫科教授会に於ける発言」）。

こうした攻撃との関係でふれておきたいことは、1938年、大阪憲兵隊は、同特高課長山中平三の名によって、大阪市内外のキリスト教会の牧師、キリスト教学校の教育者たちに質問状を送り回答を求めている。その質問は13項目にわたっているが、主たる問題点は、「天皇とキリスト教の神との関係」、「教育勅語とバイブルとの関係」であり、天皇を絶対とするか、キリスト教の神を絶対とするかを問いつめていくものであった。

このような「圧力」は同志社だけではなかったのであるが、草川配属将校を中心とする右翼・軍国主義者たちの活発な湯浅攻撃によって同志社は特に世の注目を受けることとなったのである。

第五に、同志社の教授会が、国体明徴論を主張する「上申組」といわれる右派グループとマルクス主義に立ついわゆる左派、あるいは、自由主義的な思想

に立つグループとに二分され、対立していた。それが大学教授会の統一を欠き、ますます内紛を深めて行ったようである。国体明徴論を極端に主張する右派の二教授を解職したこと、および、リベラルな教授を擁護したことなどにより、総長は左派支持者として攻撃を受けた。さらに、左派の3人の教授が警察に拘引された。これも大学にとって打撃であった。

そのうえ、教授会の討議は、直ちに、それを歪曲(ワイキョク)して（意図的にまげて）軍部、憲兵隊、新聞社などに伝える人々がいた。それが、さらに拡大解釈され、時には歪曲して新聞に大きく報道された。

「国賊湯浅」の名前が国会の議事録にまでのるようになり、同志社をつぶすべきだと部下たちに言われるに至って、憲兵司令官中島今朝吾中将は、京都にまで出かけてきて、湯浅八郎総長に直接会うこととなった。京都ホテルで二人はじかに会い、話しあってみると、中島中将は非常に紳士的な人であり、中島中将より湯浅総長は、同志社教授会における発言も、直ちにそれを歪曲して（悪くまげて）憲兵隊に密告されていることを知らされた。例えば、同志社が「御真影」（天皇・皇后の写真を当時はこうよんだ）を受けることになった時、「御真影を受けることは重要なことだから、教授がたに宿直を願わねばならなくなる。御迷惑をかけるが責任の分担をお願いする」と湯浅総長が発言したことが、「御真影をいただくのは迷惑だ」と発言したという密告が、その日のうちに憲兵隊に届いていたということがあり、そのことが国会で不敬事件として問題になったということもわかった。こうした語りあいによって、互に問題の所在がよくわかり、この時以来、湯浅は中島中将とは信頼をもってつきあえる知人となった由、東京に来られたらお立寄り下さいといってくれたという。

しかし、このような経験が、湯浅をして「教授会は信用できない」と考えさせることになり、ますます彼を孤独にし、人に相談しないで独りでものごとを決定する人にして行ったように思える。「もう少し私共に相談して下されば」と善意にみちた人たちの嘆きも耳に入らない総長になっていったのではないかと思われる。

このような事件の重なる中で、文部省に呼びつけられ、廊下の板の椅子に坐って一日中待たされた上、「今日は忙しいから明日また来い」といわれるというような、大学総長に対して文部省としてあるまじき侮辱的な取扱いを受けるという経験もしたのである。

当時、皇国主義的立場で日本の言論界に影響力をもっていた叔父（母の弟、明治20年代の平民主義より転向後）徳富蘇峰は同志社の窮状を少しでも助けようと努力し、同志社六十周年記念にと宮内省から御下賜金が賜られた。しかし、それも同志社攻撃をやわらげる力にはならなかったらしい。京都の街中の電柱には、「国賊湯浅を倒せ」のポスターがはり出され、抜刀した男が湯浅家の玄関に現われたり、家の周辺は右翼の運動家たちにとり囲まれていたという。長男の洋は11才、長女洸子は、小学校入学を前にして６、７才であったが、こうした幼い子供を持つ家庭で、緊迫する雰囲気の中、洸子は脳膿瘍という不治の病におかされていたのであり、湯浅は彼女の死の３、40分前まで同志社での会議に忙殺されていたのである。このような苦難のさ中で愛する洸子を失った嘆きがいかに辛いものであったかを湯浅八郎は、筆者に幾度か語られた。

そして、1937（昭和12）年２月、遂に同志社総長を辞任した。47才であった[3]。

大学内外の右翼・軍国主義者たちだけではなく、当時のジャーナリズムも、こうした同志社の苦しみを、右にせよ、左にせよ、拡大・誇張し、あるいは、歪曲して書き立てることによって、当事者たちをさらに苦しい立場に追いこむこととなった。そして、それと共に、超国家主義、国体明徴思想、軍国主義の力を世人のふところにより深く浸透させる働きをすることとなったのではないかという印象をうける。

〔付記〕(1) 当時のキリスト教関係の受難事件

1940年、反戦論の疑いで賀川豊彦が憲兵隊に拘引されており、同年、救世軍はスパイ容疑で憲兵隊の捜査を受け、指導者山室軍平の名著『平民の福音』の紙型（印刷用の鉛版作成のための活字の組み版型）まで没収されている。

1942年になると、ホーリネス系全教会が弾圧され、多くの教職、信徒が投獄されると共に、解散を命ぜられている。「同志社事件」は、これらの端緒だったともいえる。

〔付記〕(2)

ドイツにおけるキリスト教弾圧は、今さらいうまでもない周知のことであるが、若い世代の人々のために短く付記しておくと、ナチス理論の宣伝家で、戦後、ニュルンベルク国際軍事裁判で絞首刑となったことで知られるローゼンベルクの「二十世紀の神話」や彼の異教徒的説教を批判したことにより、告白教会は、数週間の間に500人の牧師が逮捕され、強制収容所に入れられた。1936年 4 月には、ルドルフ・ヘスによって、ナチス党員は教会員となることを禁止され、6 月には聖書の販売が禁止されている。

ドイツ福音教会を守るために組織された「牧師緊急同盟」の指導者で、『されど神の言は繋がれたるにあらず－ダハウ獄窓説教』（国谷純一郎訳、新教出版社、1950年）などにより、戦後日本でも広く関心をもたれた神学者、マーティン・ニーメラー (Martin Niemöller) は、同志社事件と同じ年の1937年 6 月、彼の教会における最後の説教後、捕らえられた。秘密に審査され、以後、説教をしないという誓約書に署名することを求められたが、それを拒否したことによって強制収容所に入れられた。

その年（1937年）のクリスマスに、彼は「･･･神と共にある私共の平和は、安楽によってよりも、むしろ苦痛によってかちとることができる。しかも、その平和は、その苦しみが馬槽の中にはじまり、十字架上に終った方の創造と祝福のうちにある」と語っている。彼が収容所で刑死することなく生きのびられたことは幸であった。1951年、スイスのロールで開かれた WCC の会議で私はお逢いすることが出来た。

もう一人のドイツの神学者ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer) は、ベルリン大学の講師、フィンケンヴァルデの伝道者養成所所長（1935年）であったが、告白教会を支持したために1936年解職され、後、反ナチス抵抗運動のため1943年捕らえられて、刑死した。彼のことは、日本のキリスト教界ではよく知られるところである。

1939年夏、私は第一回世界キリスト教青年会議に日本から最年少の学生代表として出席したのであるが、このアムステルダム会議は、第二次大戦の勃発を必至と見るキリスト教会の指導者たちが、どうしても、その前に世界のキリスト者青年1500人を集め、「キリストの勝利」を共に確信させようとの祈りをもって計画されたものであった。後に世界教会協議会 (WCC) の総幹事となったヴィザトウフト（Dr. W. A. Visser't Hooft、オランダ人でエキュメニカル・ムーヴメントの中心的人物）が主たる組織者であり、世界中の代表的神学者たちも、青年と共に招かれていた。この会議は歴史的に非常に重要な意義をもつ会議となったのであるが、この会が進行する間にも、ナチスの力が増大してゆくドイツからユダヤ人学生、自由主義的学生たちをどう無事に脱出させるかという困難な課題をかかえて、キリスト教会の指導者たちは非常な苦心と努力をはらっていたのだということを、私どもは、後になって知らされたことであった。この会議に出席していたヨーロッパの青年たちも、会議終了後、「次は戦地の塹壕で会おう」といいあって別れてゆくのが、胸痛く印象に残っている。

1930年代はこのような時代だったのである。そして、会議後、私共は、ヨーロッパを旅してイギリスについた時には、もう戦争が始まっており、空襲警報の中、政府より、旅行者にまでも、給与された防毒マスクを各自もって地下道へかけこまねばならないという状況であった。

〔4〕「同志社事件」後の湯浅八郎

時は少し逆上るが、湯浅八郎に筆者が個人的に始めて会ったのは、「同志社事件」で総長を辞任された直後の1938年の夏、御殿場富士岡荘において開催された日本キリスト教女子青年会（日本YWCA）全国学生のカンファレンスに於てであった（修養会（リトリート）とよんでいた）。光静枝学生部幹事を指導者とする日本 YWCA 学生部は、今から考えると、なかなかの見識と勇気を持っていたことが感慨深く思える。既述のように、同志社事件と同じ年の1937年には文部省は「国体の本義」30万部を全国に配布しており、東京帝国大学、京都帝国大学には国体講座が文部省の指令によって開講されていた（1936年）。

このような社会状況にあって、「国賊」呼ばわりをされて同志社総長の座を追われた湯浅八郎を、全国の女子大学、専門学校の学生キリスト者の年中行事として定着していた修養会に、講師の一人として招いたことは、勇気を要することであり注目に値する。大人の指導者たちも慎重に考慮し、討議を重ねた上での選択であったことと思う。

お名前や同志社事件は既によく知っていたが、私はこの会で湯浅八郎博士に初めてお会いしたのであった。多くの学生の前に姿をあらわした湯浅八郎には、「国賊」よばわりをされ、いじめられ、同志社総長の座を追われた人としての「負け犬」的みすぼらしさは全然感じられなかった。むしろ、非常に冷静で明るい意気がみち、私たち学生に向って人間の自由、人類平和の大切を説く姿には、堂々とした感と迫力があった。私は、この時、全国学生委員会の委員長の任を負っていたのであるが、そんなこととは関係なく、仲間の学生たちと共に林の中などで湯浅博士をかこんで、熱心に御意見をきき、また、皆で語りあった思い出が印象深く残っている。申しわけないことであるが、この年の他の２、３人の講師が誰であったかがどうしても思い出せない。それほど湯浅八郎が学生たちに与えたインパクト、印象が鮮明だったのだろうと思える。

この時、同志社事件に話題が行った時、湯浅八郎の言葉で今も忘れられないのは、自分を攻撃し、罵倒し、同志社を追い出した人たちのことを次のように

言われたことである。「彼らは私を理解してくれなかった。しかし、私は彼らを理解する者でありたいと考えている」と。そこには、怨恨も反感も全然感じられなかった。私は私の信念に基づいて最善をつくした。それが彼らには受け入れられなかったから総長の座を下りたのである。あとは神様のお裁きにゆだねるだけだ —— という、すっきりとした姿であった。人間には悪魔のような面と神のような面とがある。その神のような面を大切にし、かけがえのない宝として尊重しなければならないというのが、先生が、この時だけでなく常に説かれたことであった。

もう一つ、学生が湯浅博士にサインを求めた時、書かれた聖句を、今も私は覚えている。「金銀はわれになし」(使徒行伝 3 : 6) であった。これは、「美しの門」のところで、もの乞いをしていた足の悪い男がペテロに施しを乞うた時、ペテロが云った言葉「金銀はわたしには無い。しかしわたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」である。すると、その男は歩き出したのである。

歴史的苦難の中にあって、職を失い、孤独になった人が、「主に従って歩くだけだ」というすがすがしさが、この時、出席した学生たちに湯浅八郎が与えた深い印象であった。いずれにせよ、御殿場の学生会議は豊かな霊的収穫をもって終わった。そして、その同じ夏、私が会長の責任をもっていた神戸女学院専門部、大学部の学生 YWCA は百数十名の参加者をえて、神戸女学院キャンパスに湯浅八郎をメイン・スピーカーとしてお迎えし、 2 、 3 日の修養会を開催した。今から考えると、神戸女学院院長をはじめ、当局者としては、同志社事件の直後のことであり、心配もあったことかと推察しうるのであるが、デ・フォレスト院長 (Dr. C. B. De Forest) は、この集会の開催を何の躊躇もなく賛成し、認めて下さった。「湯浅先生は私の尊敬する友人です」といわれた。そして、デ・フォレスト院長をはじめ、日本人、アメリカ人を含めて多数の教師たちもこの会合に終始出席してくださったのであった。

単純な私共当時の女子学生たちは、有意義な集会を持つことができたと非常

に喜び、満足したのであるが、大人の先生方としては、外部からの干渉、圧力などへの警戒もあり、御心労が大きかったのではないかと、今さらながら、考えさせられるのである。

しかし、ここで特に強調したいことは、「同志社事件」という大学をゆさぶった大きな悲劇的ともいえる出来ごとによっても、心の傷を受けたところを私共に全然感じさせない、湯浅八郎のすがすがしさであった。「神が見守ってくださっている。何も恐れるものはない。私共は神と共に歩めばよいのだ」といった、単純すぎるほど一本調子な確信、信仰が湯浅八郎を支えていたのだと思う。また、それが、私共学生に深い感銘を与えたのだと思う。

このようにして、湯浅八郎博士とは、1938年の御殿場以来の長いおつきあいとなったのであった。

〔5〕マドラス会議よりアメリカへ

インド南部のマドラス郊外のタンバラムにあるマドラス・キリスト教大学を会場として、世界宣教会議 (The International Missionary Conference, IMC) が開催されたのは、1938年12月－1939年 1 月にわたるクリスマスの時期であった。この会議は、マドラス会議（タンバラム会議という場合もある）と称される。エキュメニズム、すなわち世界教会の一致を目ざす1910年のエルサレム会議の課題を継承する IMC のこのような世界会議が、アジアで開催されるのは、はじめてのことであり、重要な宣教会議であった。通常、西洋諸教会のキリスト者が出席者の大多数を占めるのであったが、この時は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等、非西洋諸国の若い諸教会からの参加者が半数以上を占めた。そして、非キリスト教世界におけるキリスト教の役割と一致を課題とする会議であった。

(1) 一神教と宗教の多元主義

それと共に、この会議のその後にも余韻を残すこととなった問題は、ホッキ

ングとクレーマーとの間にたたかわされた烈しい論争であった。

ウィリアム・E・ホッキング (William E. Hocking, 1873-1966) は米国人で、平信徒による外国ミッションを再検討すべきだという課題を強調すると共に、他の諸宗教との間における相対主義を主張するハーバード大学の教授であった。彼は、この問題を考える委員会（コミッション）の委員長として、1931年から1932年にかけてインド、ビルマ、中国、日本など、アジア諸国を他の仲間と共に訪ねて歩いた人である。その成果は *Re-thinking Mission* (1932) として印刷されたが、その「一般的原則 (general principles) 」はホッキングの執筆によるものであり、論争を呼んだ文章である。

他方、ヘンドリック・クレーマー (Hendrik Kraemer, 1888-1965) はバルト主義に立つオランダの神学者で、インドネシアに1922年に行き、オランダ聖書協会 (Netherlands Bible Society) で15年間働き、キリスト教とインドネシアのイスラム教（回教）との関係、および、キリスト教と諸宗教との関係を研究していた。そして、マドラス会議のための準備書とも、テキストともいうべき『非キリスト教世界におけるキリスト教のメッセージ』 (*The Christian Message in a Non Christian World*, 1938) を執筆した。それは、聖書的リアリズムと他宗教とを鋭く区別するものであって、リベラルな立場のキリスト者からは批判も強かった。ホッキングとクレーマーの論争点は、キリスト教を絶対とするか、そうではなく、他の諸宗教と積極的にかかわり、より開かれた態度で対話を持つべきかといった問題をめぐる論争であった。この論争は、マドラス会議における重要な課題であった。当時、主催者世界宣教会議 (IMC) では、クレーマーの立場が主流と見なされたようであり、その後、ヨーロッパに帰ったクレーマーは、戦後創設された世界教会協議会 (WCC) の付属機関、スイスのボッシイにおけるエキュメニカル研究所 (The Ecumenical Institute of the Cateau de Bossey) の初代所長に任命されている。しかし、この課題はこれで終わらず、他宗教との対話の問題は、WCC においても、キリスト教界一般においても、その後も問題として取り上げられて来ていることは付記に示した通りである。

〔付記〕(3)

しかし、この論争は、マドラス会議の問題にとどまらず、その後、さらに新しい視点、グローバルな課題として展開している。本稿は、これが主なるテーマではないので、この問題に深く入ることはさしひかえるが、ことに20世紀後期より21世紀にかけて世界の文化的グローバル化の流れが強まる中で、エスニック・グループの多様な文化への関心、多様な価値観への認識が深まっている。西洋の文化、あるいは、キリスト教を絶対とする考え方はつつましく抑制され、多様な文化的価値、諸宗教が、独自に豊かな人類的価値をもつものとして確認されてきている。

こうした文化的・思想的状況の中で、たとえば、スコットランドのエディンバラ大学出身（博士号も同大学で取得）の神学者ジョン・ヒック (John Hick) の『神は多くの名前を持つ』（*God Has Many Names*, 1980、日本語訳、間瀬啓允、岩波書店、1986年）などにみられるような、新しい宗教的多元主義が論じられてきた。ヒック自身、長老派教会の福音主義的キリスト教の伝統の中で育ってきた人であり、長老派教会で按手礼を受けた牧師である。安易な宗教多元主義ではない。イエス・キリストを自分の「主」、「救い主」として信じる信仰、福音主義的、正統的信仰を自らの中に堅持することにおいてはクレーマーらと共通の核を内在させながら、もう一つの極において、それが、排他的・独善的一元論に固執するものとなることを抑制し、警戒する。その緊張関係を内在させながら、宗教界に開かれた寛容をよびかける。つまり、自らの宗教を絶対とする独善の鎧（よろい）を脱ぎ捨て、謙虚に、寛容な精神をもって、異質のもの、異なった諸宗教の中にある真実を理解し、受け入れる対話の道を指さしているのである。ヒックは1989年には、母校エディンバラ大学で「ギフォード・レクチュア」 (Gifford Lecture) を行っているが、そのテーマは *An Interpretation of Religion—Human Responses to the Transcendent* (Macmillan Press, 1989) である。「超越的なるもの」への人間の対応（あるいは、応答）を課題としているのであり、それは、“究極的に超越するもの”によって自己中心主義が克服されるところの「実在」 (the Real)、それをキリスト者は「神」とするが、他の世界宗教は異なった表現で示す。そうした「超越的なるもの」への多様な信仰形態に対して開かれた理解をもつことの大切さをヒックは説いているのである。無原則な宗教多元主義ではないことは明らかにしておかねばならない。

1930年代にホッキングが提起した問題の、20世紀から21世紀にかけての一つの重要な展開とみることができる。それは、諸教会の一致運動としてのエキュメニカル・ムーヴメントが、更に、全世界的な宗教的対話の精神へと拡大していく可能性をも示唆するものである。

マドラス会議には、賀川豊彦、海老沢亮、河井道、湯浅八郎等、多数の日本人代表が出席した。この論争に湯浅八郎がどうかかわったか、そこからどのような問題意識を呼びおこされたか、それは明らかでない。ただ、本稿の最終回

にふれようと考えている湯浅独特の「宗際」(inter-religious)、「民際」(inter-racial)といった考え方へと水面下でつながってゆく底流となったかもしれないとも思えるのであるが、ここではこの問題には立ち入ることをひかえる。

マドラス会議終了後、湯浅八郎は日本に帰らず、アメリカに渡った。それは、アメリカ諸教会がアジアのキリスト者による「マドラス会議のメッセージ」をききたいということで、アジア・アフリカの数教会のキリスト教指導者を招いたことによる。日本からは湯浅八郎、他に中国（燕京大学の教授）、インド、フィリピン、アフリカの代表的キリスト者らが、一つのグループとして選ばれ、そのグループのオーガナイザーというか、世話役が、上にも述べた、アメリカンボード外国宣教部のルース・シーベリー女史 (Ruth I. Seabury) であった。これは、湯浅八郎がその後、長いおつきあいをすることとなるシーベリー女史との始めての出会いであったと思う。これまで、常に西洋からアジア、アフリカなど非キリスト教国へ宣教師や教師が送られてきたが、アジアから西洋へキリスト教のメッセージを伝えるという、恐らく最初の試みであった。そういう意味で、これらアジア、アフリカのティームの訪米は歴史的な意味をもつものであった。彼らは船でインドからイタリアのジェノバにゆき、その船旅の間に、自分たちのマドラスでの体験を、そして、考えさせられたことをアジアの若い教会からのメッセージとしてアメリカの諸教会にどう伝えるかを語りあい、準備をした。そして、ジェノバからアメリカへ渡り、２ヶ月にわたって、全米の諸教会を訪ねてまわったのである。彼らがホッキングとクレーマーの論争点をアジア・アフリカのキリスト者としてどのように受けとめ、どのようにアメリカの諸教会に報告したか？その記録はさがしたが、入手出来なかった。

(2) 公民権運動

この旅の途中、ワシントンD.C. で次のような出来ごとがあった。彼らはあるホテルのレストランでコーヒーを注文した。すると、給仕が瀬戸もののコーヒー・カップを皆に持って来たが、アフリカの婦人に対してだけは紙コップでコ

ーヒーを持ってきた。このアフリカ婦人は南アの酋長の娘で、非常にすぐれた指導者であった。世話役のルース・シーベリーが「どうして紙コップなのか？！」と叱責すると、「あなたの女中には紙コップで充分でしょ」と給仕はいった。ルースは、「何をいうんですか。この方はアフリカの立派な指導者で、私の大切なお客様なのよ！」といったが、給仕は瀬戸物のコーヒー・カップを黒人のアフリカ婦人に対しては頑として持って来ようとはしなかった。彼女は「ルース、私はあなたの女中でいいのよ」といった。シーベリーさんは恥ずかしさに赤面して、うなだれ、「申しわけありません。これがアメリカの最も恥かしい人種差別の問題なのです。本当にごめんなさい」と涙をもってあやまったという。このことは、湯浅八郎からもシーベリー女史からも私はきいた。これが、1939年におけるアメリカにおける黒人差別の実態であった。バスもレストランもトイレもすべてにおいて白人と黒人とは区別されていて、白人の生活領域に対等の立場で入ることは出来なかったのである。

社会悪の問題を見抜く洞察をラインホールド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) から学び、非暴力の抵抗運動によってその悪を克服する精神と方法をインドのマハトマ・ガンディ (Mahatma Gandhi) から学んだと自ら語っていた黒人牧師、マノティン・ルーサー・キング (Martin Luther King, Jr. 1929-1968) を指導者として、1950年代～1960年代に進められた公民権運動 (Civil Rights Movement) によって、黒人差別の悪がアメリカの社会的自覚となって行ったのである(4)。それは、ケネディ大統領時代、心ある白人のリベラル派の協力をも得て、全国的運動となり、首都ワシントンにおける20万人の大行進ともなり、遂に公民権法が成立、ニグロと見下していた黒人差別が法的に撤廃されたのは1964年であった（周知のようにキングはノーベル賞を受賞したが、1968年に暗殺されている）。

湯浅八郎がアジア・アフリカの仲間と共に、マドラス会議のメッセージを伝えるために、ルース・シーベリーを案内人としてアメリカ各地を旅したのは、こうした公民権運動によってアメリカが目を醒ますより10数年も前の1939年だったのである。そして、これは、彼にとって二度目のアメリカ訪問であり、6

ヶ月の予定が、はからずも、8年間となる滞米生活のはじまりだったのである。

（以下次号につづく）

注

(1) 京都市編『京都の歴史』第９巻、212頁。
滝川幸辰『激流』、66頁。

(2) 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』、192－193頁。

(3) 「同志社事件」参考文献
(a) 筆者が湯浅八郎初代ICU学長よりいただいた「諸資料」、くわしい談話の「テープ起し」など。
(b) 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』。
(c) 高道　基「同志社の抵抗－神棚事件からチャペル籠城事件まで－」。
(d) 和田洋一「1937年夏のチャペル籠城事件」他がある。

(4) キング牧師 (Martin Luther King) の著書の『自由への大いなる歩み』(*Stride Toward Freedom*) はアラバマ州モントゴメリーにはじまる黒人による非暴力抵抗運動の実態を詳細に語る参考文献である。

参考文献

京都市編『京都の歴史』第９巻　学芸書林、1976年。
滝川幸辰『激流』河出書房新社、1963年。
高道　基「同志社の抵抗—神棚事件からチャペル籠城事件まで—」同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究』Ⅱ　みすず書房、1969年、1-40頁。
同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』日本YMCA同盟出版部、1977年。
Martin Luther king, Jr., *Stride Toward Freedom*. New York: Marie Rodell & Joan Daves, Inc., 1958.
マーティン・ルーサー・キング著、雪山慶正訳『自由への大いなる歩み』岩波新書、1959年。
和田洋一「1937年夏のチャペル籠城事件」『キリスト教社会問題研究』第８号、1964年、99-113頁。

訂正

武田清子「湯浅八郎と二十世紀（一）」（本誌49号）37頁６行目の『新世界』は、『新女界』の誤りです。

Yuasa Hachiro and the 20th Century (2): From Entomology to the Vortex of the "Doshisya Incident"

<Summary>

Takeda Kiyoko*

1. A Young Immigrant and University Study in the United States (1908-1921)

Yuasa Hachiro made up his mind to do university studies after three years of experience as a farm laborer. After Completing elementary school and high school education, he studied at Kansas State Agricultural College and at the University of Illinois, majoring in entomology, and received his M.S. in 1917 and his Ph.D. in 1921. He workrd as a researcher in the Zoology Department of the University of Chicago and as an entomological engineer in the Department of Natural History at Illinois State.

2. Teaching at Kyoto Imperial University and the Introduction of Ecology to Japan (1924-1943)

Yuasa Hachiro married and returned to Japan. Having been invited to be a professor in the Department of Agriculture at Kyoto Imperial University, he taught students using an interdisciplinary approach and introduced the concept of "ecology" to academic circles in his lectures on entomology. Under his guidance, scholars, such as Imanishi Kinji, broke new ground in the field of ecological evolution theory. Yuasa's academic contribution was a kind of seed for the future development of primate studies at Kyoto University.

When Yuasa was a member of the Council of Kyoto Imperial University, the "Takigawa Incident" happened. It was a protest movement by the faculty and students of the Law Department of the University against the policy of the Ministry of Education to dismiss Professor of Law, Takigawa Yukitoki, for his liberal position. Because Yuasa expressed his sympathy with the protestors, he was blacklisted by the Ministry of Education.

3. Suffering as President of Doshisya University and His Resignation (1934-1937)

Yuasa was invited to become the 10th president of Doshisya University. He believed that his mission was to keep the spirit of Niijima Joe, the founder of Doshisya, alive. However, since Yuasa was marked as a liberal, his assumption of the presidency made Doshisya the target of ultra-nationalists. At that time, the presence of military officers attached to universities as military trainers caused serious problems for the universities. Especially, a military officer attached to Doshisya, Kusakawa Yasushi, an extreme rightist and a man of abnormal character, instigated a movement to expel President Yuasa from Doshisya by agitating students. He was behind various incidents such as the Shinto Altar Incident and the question on the Educational Principle whether the basis of education should be Christianity or the Imperial Rescript on Education, etc. The faculty was divided into right and left, and remarks made in the Faculty Meeting were distorted and leaked to the Ministry of Education, to the military authorities and the media. Posters saying, "Knock down the nation's traitor, Yuasa!" were put on utility poles in the city of Kyoto. There arose a cry that Doshisya should be closed as long as Yuasa was president. Finally, in February 1937 Yuasa resigned as president of Doshisya. The "Doshisya Incident" was the beginning of subsequent oppression against Christians and others.

4. Madras Conference and Visit to the USA

The International Missionary Conference (IMC) was held in the winter of 1938 to 1939 in Madras, India. This was the first important worldwide conference ever to be held in Asia. Yuasa attended it with Kagawa Toyohiko and others. In the Conference, the controversy between Hendrik Kraemer and William Hocking over Christian monotheism and its relation to other religions arose. This subject is being discussed even today. After the Conference, Yuasa, with representatives of China, India, the Philippines and Africa were invited by churches in the USA to bring the "Madras Message" to them. The organizer of this team was Ruth I. Seabury. They experienced the problem of racial segregation in the States during their rist. Opposition to segregation would eventually develop into the Civil Rights Movement in the nineteen fifties and sixties.

*Although this journal usually lists family names last in articles written in English, in this case, at the author's request, we have followed Japanese name order.